

昭和57年度 第37回 文化庁芸術祭主催公演 芸術祭コンサート 東西楽器群の融合 三木稔 作曲 Comp. by Minoru Mik



鳳凰三連

Eurasian Trilogy

1982年10月9日(日) 午後6時30分開演
主催—文化庁芸術祭執行委員会
制作—日本音楽集団/(財)読売日本交響楽団
五反田 ゆうぽうと簡易保険ホール

ごあいさつ

文化庁芸術祭執行委員会会長・文化庁長官 佐野文一郎

昭和57年度の芸術祭主催公演・芸術祭コンサート「鳳凰三連」の開催にあたり、ごあいさつを申し上げます。

芸術祭は、芸術家の方々に意欲的な作品を発表していただくとともに、広く国民の皆さまに優れた芸術の鑑賞をおすすめし、我が国芸術文化の向上と普及を図ろうとするものであります。

この芸術祭は昭和21年秋に発足し、今回で第37回を数えることになりました。芸術祭大阪公演もすでに5年目を迎えて軌道に乗るなど、年々その充実を図ってきております。この間の芸術関係各位の御協力と国民の皆さまの御声援に対し、心から感謝の意を表しますとともに、今後一層の御支援をお願いするものであります。

さて、今年の芸術祭では、主催公演、協賛公演及び参加公演（作品）が、それぞれ多彩に繰り上げられることになっておりますが、特にここに御鑑賞いただく「鳳凰三連」は東西楽器群の融合を試みる作曲家三木稔氏の、ライフ・ワークのひとつであり、十余年をかけて完成した序破急三部作の挙初演は、我が国音楽界の注目するところであります。また、山岡重信氏指揮による日本音楽集団と読売日本交響楽団のジョイントは、まさに東西の融合を示すコンサートといえます。

この公演が皆さまの御期待に添うものであり、ひいては我が国芸術文化発展のひとつの契機となることを願い、御鑑賞をおすすめする次第であります。

日本音楽集団代表 長沢 勝俊

日本の伝統楽器により、現代に生きる音楽を作ろうという旗印のもとに、日本音楽集団が編成されてから今年で18年。この間、邦楽器による創作・演奏はもとより、洋楽器との共演作品の実現にも心をいたし、多くの音楽愛好者の支持を受けて参りました。

今回、文化庁芸術祭主催公演として、三木稔作曲による〈鳳凰三連〉が演奏されることになりました。日本初演を含む、東西楽器群の融合を目ざ

したこのような大規模な演奏会は、正に画期的なことと言えます。私たち日本音楽集団は18年間の経験を生かし、その総力をあげてこれに取り組み、皆さま方のご期待に添うつもりでおります。

また、日本の代表的なオーケストラとして、国際的にも高い評価を受けておられる読売日本交響楽団の皆さま方、そして豊かな音楽性と円熟した技術で定評のある指揮の山岡重信氏と共演できることを幸せに思っております。

財団法人・読売日本交響楽団理事長 為郷 恒淳

読売日本交響楽団は、昨年秋に東独ライブウィヒでの、新しいゲバントハウスのこけら落しのためのオーケストラ・フェスティバルに出演する機会を得ましたが、本日共演する日本音楽集団も、私どもが出演した幾日前に、同じステージで、三木稔作曲の《鳳凰三連》の〈急の曲〉を、クルト・マズア指揮のゲバントハウス・オーケストラとの共演で、世界初演したとのことであります。

本日、この世界の檜舞台に出演した者同志が、

文化庁芸術祭主催公演芸術祭コンサートの名ののもとに、《鳳凰三連》全曲を共演出来ることを光栄に思っております。

今までにも、日本の伝統的な楽器と西洋の楽器との組み合わせによる楽曲は、いくつもありましたが、《鳳凰三連》のような大曲が生まれたことは、ご同慶の至りであります。

この東西楽器群の融合による《鳳凰三連》を皆様と共に、大きく飛翔させたいと願っております。

鳳凰三連

三木 稔作曲

〈序の曲〉 1969年

尺八／坂田誠山 二十絃箏／吉村七重 太棹三味線／坂井敏子
弦楽合奏／読売日本交響楽団

〈破の曲〉 1974年

独奏二十絃箏／野坂恵子
管弦楽／読売日本交響楽団

★休 憩★

〈急の曲〉 1981年（日本初演）

邦楽器群／日本音楽集団

笛／藤崎重康

尺八 I II／宮田耕八朗・坂田誠山・福田輝久・竹井誠・米澤浩・水谷雅康

細棹三味線／太田幸子・加藤洋，太棹三味線／坂井敏子・花房はるえ

琵琶／半田淳子・田原順子

二十絃箏／野坂恵子・吉村七重・宮越圭子、十七絃箏／木村玲子・内藤洋子・滝田美智子

打楽器／堅田啓輝・高橋明邦・黒坂昇・田村拓男

管弦楽／読売日本交響楽団

指揮(全曲)／山岡重信

HŌ-Ō SANREN (Eurasian Trilogy)

Composed by Minoru Miki

JO NO KYOKU(1969)——Prelude for Shakuhachi, Koto, Shamisen and Strings

Seizan Sakata(Shakuhachi), Nanae Yoshimura(20-string Koto),

Toshiko Sakai(Thick-necked Shamisen)

Yomiuri Nippon Symphony Orchestra(Strings)

HA NO KYOKU(1974)——Concerto for Koto and Orchestra

Keiko Nosaka(20-string Koto)

Yomiuri Nippon Symphony Orchestra

★INTERVAL★

KYU NO KYOKU(1981)——Symphony for Two Worlds

(First performance in Japan)

Nihon Ongaku Shudan(Japanese traditional instruments)

Yomiuri Nippon Symphony Orchestra

Conductor (Whole pieces): Shigenobu Yamaoka

曲目解説

石田 一志

三木稔は東西の楽器を含む作品を数多く作曲しているが、このジャンルの第一作である〈序の曲 Prelude for Shakuhachi, Koto, Shamisen and Strings(1969)〉と〈破の曲—Concerto for Koto and Orchestra(1974)〉、そして昨年ライブツィヒのゲヴァントハウス・オーケストラによって世界初演された〈急の曲—Symphony for Two Worlds (1981)〉の三部から成る《鳳凰三連—Eurasian Trilogy》はその内の最大規模の作品である。三部作のタイトルになっている序・破・急は、いうまでもなく雅楽の理論として大陸からの伝来以降、音楽だけでなく、連歌や馬術にまで広く日本の芸能芸術のなかで流用されていった構成法にかかわる伝統的用語である。楽曲の構成原理としては雅楽でも能楽でも基本的には本格から破格へ、静から動へ、緩から急へという方向を三段構えで次第に展開するということを意味しており、《鳳凰三連》の場合も三作はその原理に従っている。すなわち〈序の曲〉は打楽器をとまなわぬ無拍子で、前奏曲と副題されているように導入部的性格をもち、〈破の曲〉は緩徐な拍子だが、協奏曲の副題のように技巧的で変化に富んでおり、最後の〈急の曲〉が、急速な拍子と躍動的なリズム感が前面に出た、交響曲の副題通りの総括的な終結部なのである。ただし序・破・急には、こうした具体的な構成原理の他に、たとえば世阿弥が晩年の「捨玉得花」のなかで「一舞一音の内にも、おもしろきは序破急成就なり」と記しているように、単に規則的な「格」ではない「格外の格」を認めた「成り就く」すなわち「落居」するという意味もある。〈序の曲〉以来足かけ13年をかけて完成された《鳳凰三連》を全体として見る場合、私には三木自身とまた三木と理念を共にする、日本音楽集団の求めた民族的伝統を尊重しつつ現代的で国際的な、新しい音楽の「成就」を意味しているように思われるのである。正に終結の〈急の曲〉が、音楽的伝統と政治社会的体制を異にする東ドイツのオーケストラから委嘱初演された作品であるように、東西音楽の融合をめざしてユーラシア大陸の東の小島から飛び立った三木と「集団」の音楽は、少なくともこの13年の間に世界にその音楽的意図と魅力を十全に伝えるに至ったのである。《鳳凰三連》の序破急には、象徴的にはこうした破格の音

楽運動の「成就」の意味も含まれていると解してもよいだろう。

本日本邦初演の〈急の曲〉は別にして、〈序の曲〉と〈破の曲〉はこれまで単独でも親しまれてきた作品なので、ここではあえて個別的にではなく、三部作全体としての特徴を項目別に記し、合わせて三木稔の音楽の全般的な紹介にあてたい。

編成と音楽的意図

この三部作の編成は副題にもあるように各曲異なるし、東西の楽器の関係にも変化がある。〈序の曲〉は、近世邦楽での伝統的な三曲合奏(尺八、箏、三味線)と近代西洋音楽における合奏音楽の基本というべき弦楽合奏を組み合わせたもので、両伝統の対決ともいうべき音楽的意図を読むことができよう。尚、この曲の箏は二十絃箏であり、野坂恵子と三木稔によってこの年開発され、〈序の曲〉の初演が舞台初登場であった。〈破の曲〉は二十絃箏と二管編成を基本としたオーケストラのための協奏曲で、伝統的な典雅さに加え強い表出能力をもつに至った二十絃箏が、三木の独立した書法とサウンドの世界をもつオーケストラに対置・対決し、その上で次第に他我の境を超越した境地へと進んでいく。それに対し邦楽器によるオーケストラというべき、日本音楽集団の合奏編成と三管編成を基本とした大オーケストラとを組み合わせた〈急の曲〉は、各種の東西楽器のソロによる対話も含み、アンサンブルを中心としての東西楽器の協調、両者の音楽のもつ感性の調和融合を意図されているといえよう。つまり、編成の上からも対置・対決から調和・融合した新しい響きへの歩みがこの三部作で表現されているわけである。

構成

《鳳凰三連》のなかでの各曲の占める性格についてはすでに触れたが、個々の曲自体の構成上の特徴については次のように考えられる。しばしば三木の作品は、一般に現代の作品には珍らしい息の長さをもっているといわれる。結局はそれというもの、どれもがテンポの緩・急の意味とは別に、開始らしい開始と、十分な展開と結尾の序破急をもっているからに他ならない。その点では、彼の作品は基本的には三部構造を示すことが多いわけ

である。しかしその三部構造は古典的な西洋音楽のような図式的な楽式からは遠い。むしろ最初に心がまえがあって、対決がつづき、最後に清澄なる境地へと達するといった精神的な三段階が音楽的に表現されているといってもよいだろう。強い記号化すれば、ABAでもABCでもなくAA'A'に近い。つまり、主楽想以外の他の要素が加わることも少なくないが、対比的な中間部といえども主楽想がいなくなるわけではなく、むしろ主楽想Aのもっと著しい変容A'があらわれる部分なのである。そして再び結尾で元来の性格に近いA'に集約されていくのである。

〈序の曲〉の場合は、三曲合奏のみが演奏するきわめてデリケートな表情の二つの部分にはさまれて、弦楽合奏のみによる多層的な書法をとったクライマックスがある。両アンサンブルの和音を意図した前半と後半に対してこの対決の部分が中間部になっている。〈破の曲〉は、一層対決の性格が強い。三箇所ある箏のカデンツァの内、第2カデンツァから少しして、オーケストラのフーガ風の書法が漸次に作り出していく重厚な響きのなかに格闘しつつも箏が埋没していつてしまうところがある。この部分が中間部で、その後第3のカデンツァ以降の結尾部で箏に主体性がとりもどされていき、オーケストラもそれに和していくのである。（編者注：第3カデンツァの中間は演奏者の自主創作が許されており、今回は野坂恵子の自作）

〈急の曲〉は、多楽章作品で冒頭に全4楽章の要素を要約し全体を展望する「導入部」がある。この「導入部」と第1楽章はもちろん続いて演奏されるが、次の第2楽章と第3楽章もアタックで演奏される。しかも第4楽章以外、大々的な結尾は用意されていないから、多楽章になっていても継続的な三部分的性格も与えられているのである。特徴的な生きの良いいリズム音型をもっていることや、編成の大きさがサウンドにあらわれていることで比較的性質の似た両端楽章に対し、この中間部を成す2つの楽章は楽器の組み合わせが特徴的で、また片や内省的な美しさを追求しているのに対し、一方は性格的で作曲者の出身地に由来した阿波踊りの民俗的な楽想まで登場するなど楽しい。こうした中間部を含む〈急の曲〉の多彩さは作曲者の音楽的蓄積と発明力が結集したものとってよいだろうし、一見両極的なものを包み込んだこの深甚な音楽は、マーラー的な全人的表現を志向しているともいえるだろう。

この東西の対立・融合の過程を、次に主題作法とその展開法にみてみよう。

序の曲

破の曲

急の曲

主題作法と展開

この三部作に限らないが、三木作品では基本的に特定の音程関係が重視される。ひとつの作品を統一する原理に音列があるわけだが、その音列自体が三木独特の陽音列と陰音列の併用という特徴をもっている。陽音列は完全4度を両端のわくにしたテトラコードの音列で、中間音は曲によって変化する。一方、三木の演繹された陰音列は、西欧近代の半音階主義のなかでも重用されていた増4度と短2度に通じる特色をもっており、明るい旋法的陽音列と、ニュアンスが強調された陰音列の併用結合が、三木作品において日本のであると同時に、現代的な独特の語法を生みだしているのである。この《鳳凰三連》の各曲は、実際には独立した主題や楽想をもっているが、それにもかかわらず相互に深い関連性と有機性が感じられるのは、この音列の設定に理由がある。〈序の曲〉には、ヴァイオリンから出る主部の主題の音列（例1a）と中間部で尺八が奏する第2主題の音列（例1b）が特に重要であるが、譜例に記したようにこの2種の音列が含まれていることがわかる。旋律にあふれたこの〈序の曲〉では、特に音程だけが強調されることはないが、多層的な線のアラベスクを形成する〈破の曲〉では、まず冒頭で基本音程（例2a）が十分に印象づけられる。この音程が陽音列だとすると、後半オーボエから提示されオーケストラで自律的に展開されていく旋律の音程（例

2b) は三木式陰音列であると共に西洋現代にも通じるだろう。前半でもっぱら陽音列的、後半でもっぱら陰音列的西欧的音程モチーフが展開され、その対決の様相が著しい〈破の曲〉に対して、〈急の曲〉は、日本の音程と西洋的音程の同時展開、和合が試みられる。この曲では、委嘱地のライブツィヒに由緒あるバッハの名が、音列にもり込まれ、このBACHと三木式陰音階のDEEsGの組み合わせ(例3)が冒頭からみられるからである。そして第1楽章では、バッハの音程がオーケストラで、邦楽器が日本の音程を主に受けもって立体的に組み合わせられる。第2楽章ではその内後者の日本の音程モチーフが、第3楽章では前者のバ

ッハ音列が支配的になるが、終楽章で再び両音程モチーフの立体的な組み合わせになる。

このような音程モチーフは移調されたり、ずれたり、装飾を加えられたりしながら、様々な楽想を生み出していく。先に〈急の曲〉に関してマラー的といったが、その手法の計画性とそれによって作り出される劇的な対照の効果は、ある意味でベルクの作法を想起させるところがあるかもしれない。とはいえ、三木の主題展開における装飾法や主題増殖におけるヘテロフォニーの手法は、彼が徹底して日本の伝統を技術的に、感性的に演繹した完全に独自のものである。

曲目のデータ

序の曲

作曲年=1969年

編成=尺八(2尺4寸管)・二十絃箏・太棹三味線・弦楽合奏(4-3-2-2-1×α)

初演=1969年10月31日日本音楽集団第10回定期演奏会(朝日生命ホール) 尺八/横山勝也 二十絃箏/野坂恵子 太棹三味線/坂井敏子 弦楽合奏/東京ゾリステン 指揮/荒谷俊治

委嘱=自主的に作曲

演奏時間=約16分

レコード=日本コロムビア(1970)

破の曲

作曲年=1974年

編成=独奏二十絃箏・管弦楽(2管編成)

初演(録音)=1974年7月6日NHK509スタジオにて録音、同年10月19日NHK・FM放送。二十絃箏独奏/野坂恵子 管弦楽/NHK交響楽団 指揮/秋山和慶

初演(演奏会)=1975年4月18日名古屋市民会館大ホール 二十絃箏独奏/野坂恵子 管弦楽/名古屋フィルハーモニー・オーケストラ

指揮/荒谷俊治

委嘱=NHK

演奏時間=約27分

レコード=カメラータ・レコード(CMT1015-8)

出版=音楽之友社(レンタル)

急の曲

作曲年=1981年

編成=邦楽器群一笛(1~2)・尺八(4~6)・細棹三味線(1~2)・太棹三味線(1~2)・琵琶(1~2)・二十絃箏(2~3)・十七絃低音箏(2~3)・打楽器(4) 管弦楽(三管編成)

初演=1981年11月12・13日ライブツィヒ(新ゲヴァントハウス) 邦楽器群/日本音楽集団 管弦楽/ゲヴァントハウス・オーケストラ 指揮/クルト・マズア

委嘱=ゲヴァントハウス命名200年記念

演奏時間=約36分

楽譜=Edition Peters 83年夏発売予定(日本国内は音楽之友社)

作曲者の初演プログラムノートより

序の曲

……日本の楽器はいわばパトスであり、エトスである弦楽合奏と対応するわけですが、私にとっては、もはや青春の形象の中で陶然と融け合った同系類の楽器ですらありました……

破の曲

……自然と合一しようとする日本人の古来の思想

を想いつつ、なおそれを切り裂く現状と闘い、究極は清澄と楽天に至ろうとする意志にしたがって……

急の曲

……世界を二分する政治体制の東と西の人々の、平和の語らいを望む心のシンフォニーとして……

演奏者たち

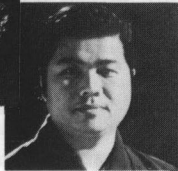
木村 重雄

ひとりの作曲家が13年の歳月を費して作曲した三部作ともなると、その作風の変化がそれぞれに微妙な影響をもたらし、質的な転換があらわれてくるのは当然といってよい。従ってそれらが三部作であるために、全体を貫き統一する手段を必要とすることになるが、三木稔の〈鳳凰三連Eurasian Trilogy〉(1969-81)にはオーケストラと邦楽器—というより、日本音楽集団のためのコンチェルトな表現形態がその機能を果たすことになる。そしてそれぞれが「序・破・急」のそれぞれにおいてアンサンブル(三曲合奏)・ソロ(二十絃箏)・全合奏という、日本音楽集団が日常的に試みている演奏活動の基礎的な三つのパターンがとりこまれ、言い方を換えればこれら三作を通じて日本音楽集団とヨーロッパ音楽の象徴ともいえるオーケストラとが協調し、時には対立するよう仕組まれているあたりに、作曲家のイデーが鮮明にうかがわれる。



坂井敏子

坂田誠山



吉村七重



〈序の曲〉の演奏者は、1969年10月31日の初演でも太棹三味線を独奏した坂井敏子を中心に、いずれも参加いらい10年余のキャリアをもつ坂田誠山(尺八)、吉村七重(二十絃箏)が加わっている。すでに太棹の領域では第一人者として豊かなキャリアをもつ坂井に対し、何回かの海外活動やリサイタルなどにより現代邦楽の中堅としてその技術と音楽性への信頼をたかめている坂田・吉村によるアンサンブルは、作品に新しい生命力をもたらすことになるだろう。

分野を問わずコンチェルトな作品には、対象とする独奏者の表現力に挑戦し、いかに能力を最高度に発揮させ、いや時にはさらに新しい可能性までも引き出すように書かれるばあいが多い。〈破の曲〉もその例外では無く、野坂恵子(日本音楽集団首席独奏者)という今日の日本を代表する



野坂恵子



山岡重信

音楽家のひとりがそなえている多彩な音楽性と最高度の技術とを前提に、加えて三木と野坂が協同開発した二十絃箏のもつ Concert(この場合大きな演奏会場 Concert Hallと、オーケストラと対抗して表現力を誇示する「協奏曲 Concerto」のふたつの意味を含む)の効果をマキシマムに発揮させようとする目的がそなわり、現在のところ独奏者はこの人以外に考えられない。そして初演以来8年の間に、野坂の演奏は習熟の度合を加えて深まり、作曲家の要求を究極的にきわめようとする姿勢がうかがわれる。

昨年秋に命名200年をむかえ、その記念として建設された新しいホールで、10月8日から今年の6月末まで、国際的なフェスティバルがおこなわれたが、外国から参加した最初の演奏団体が日本音楽集団であり、指揮者のクルト・マズアにより〈急の曲 Symphony for Two Worlds〉は10曲の記念委嘱作品のうち最も高い評価を受けたと伝えられている。その演奏に〈序の曲〉〈破の曲〉の4人の独奏者たちも勿論参加しているが、更にもうひとりの首席独奏者である宮田耕八朗(尺八)、常任指揮者である田村拓男(この場合は打楽器)の2人の創立メンバーをも核とし、中堅の演奏者をふくめて望みうる最良の演奏を聴かせたが、ここでもさらに意気込みを新たにした日本初演がおこなわれようとしている。

指揮の山岡重信(1931-)は自他ともに認める現代日本オーケストラ作品への造詣と演奏における第一人者で、コンサートのプログラムには原則として日本の現代作品をとり上げ、しかもその選曲が多岐多層に及んで偏ることがなく、スコアが散失しているばあいにはパート譜からでもそれを作成するなど、単に周囲の眼につく作品をとり上げるということだけでなく、つねに積極的に、したがって入念に再現し、作曲家よりの信頼を得ている。

その山岡がデビューした読売日本交響楽団は、

この秋創立20周年を迎え多彩な企画をしている。「ゲヴァントハウス専任指揮者Gewandhaus Kapellmeister」クルト・マズアを名誉指揮者とする縁もあって、昨年フェスティバルには日本音楽集団よりほぼ半月後の12月2・3日に加わり、常任指揮者ラファエル・フリーベック・ド・ブルゴスと小林研一郎により、武満徹の〈鳥は星形の庭

に降りる〉などを演奏している。このところ外人指揮者の客演が多く、ために日本の作品を演奏する機会は必ずしも多くないが、しかし日本を代表するメジャー・オーケストラのひとつとして力量は十分に認められており、「ゲヴァントハウス」に勝るとも劣らぬ結果が期待される。

作曲家より

今日は、私にとっても記念すべき嬉しい日です。13年かかって、いや日本音楽集団創立以来18年皆さんに応援して頂いて、ここまで至りました。

決して混り得ないという極論もある東西の伝統ですが、共同作業を繰り返すことによって、新しい文化と異民族間の平和に至るのだと自分に言い聞かせながらの日々でした。

これから先にも、同志の人たちと再び確かな歩みを残すことができますかどうか、今は最も苦しい時と自覚しています。暖かく、かつ厳しく見守っていて下さい。

こうして、私たちのコンサートに臨場して頂けることは何よりの励ましとなります。ほんとうにありがとうございました。

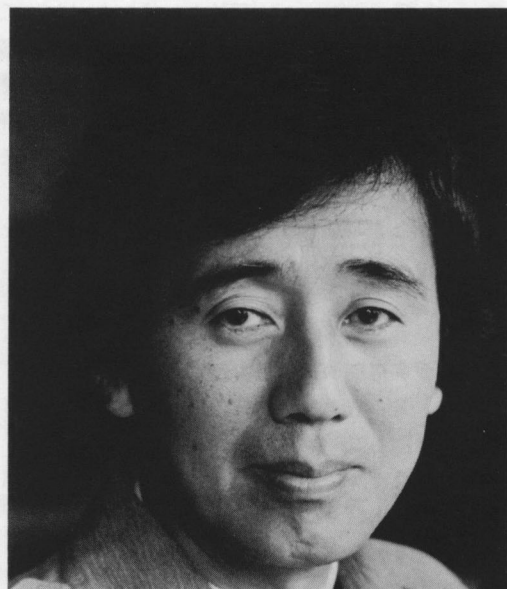
三木 稔のプロフィール

1930年、徳島市に生れる。東京芸大作曲科卒。池内友次郎、伊福部昭に師事。在学中、処女作〈交響的三楽章〉がN響で初演される。卒業後、未発表の二つの交響曲のほか〈レクイエム〉〈阿波〉〈我鬼〉〈阿波祈禱文・連作〉など合唱作品を多く作曲。

1964年、同志と日本音楽集団創立。現在までにその邦楽器群への作品に〈古代舞曲によるバラフレーズ〉〈凸〉〈巨火〉〈ダンス・コンセルタントI・II・III〉などがあり、コロムビアの4枚組レコード・アルバム「日本音楽集団による三木稔の音楽」(1970)は芸術祭大賞受賞。

1969年、野坂恵子に協力して開発した二十絃箏のために〈天如〉〈竜田の曲〉〈東から〉〈破の曲—箏とオーケストラのための協奏曲〉〈箏譚詩集II〉〈鎮魂協奏曲〉他を書きつづけている。カメラータ・レコード4枚組アルバム「野坂恵子・三木稔/二十絃箏の世界」(1979)が芸術祭優秀賞受賞。

1975年、最初のオペラ〈春琴抄〉を作曲。ウィンナー・ワールド・オペラ賞受賞。79年にはイングリッシュ・ミュージック・シアター委嘱のオペラ〈あだAn Actor's Revenge〉がロンドンで初演。81年、



そのアメリカ初演で指揮。現在、コリン・グレアム台本の第3作を準備中。85年6月アメリカにて初演予定。

オーケストラ作品には〈管弦楽のための—春秋の譜〉〈マリimba協奏曲〉などのほか、1981年、ゲヴァントハウス・オーケストラ200年記念委嘱初演の〈急の曲Symphony for Two Worlds〉によって、邦楽器とオーケストラを結ぶ〈鳳凰三連Eurasian Trilogy〉(序の曲・破の曲・急の曲)を完成。ゲヴァントハウスからは更に大規模の作曲を委嘱されている。

児童合唱を伴う大きな作品には〈タロウ〉〈阿波の子タヌキ譚〉がある。オペラ、オーケストラ、集団などへの大規模な作曲とは別に、声と器楽を平等に生かし、現代社会に直接関与する独自の“歌楽”様式に意欲を燃やしている。〈ペロ出しチョンマ〉〈うらかぐら“星界の報告”〉など。他に映画〈愛のコリーダ〉、NHK連続テレビドラマ〈鳴門秘帖〉、多くの舞台、演劇、バレエ、現代舞踊、邦舞などの音楽も手がけている。

現在、日本音楽集団音楽監督。また、1972年以来、8次にわたるその海外公演のプロデュース、機関誌「邦楽現代」の発行責任者を全うしてきた。

“HŌ-Ō SANREN” (Eurasian Trilogy)

The composer Minoru Miki was raised in an environment alive with the sounds of traditional Japanese instruments. His formal musical education, on the other hand, was cast entirely in terms of Western instruments. In 1962, some ten years after setting out on his career as a composer, Miki once again came into contact with Japanese instruments. Since then, his ongoing labor of love has been to create a musical forum where instruments of East and West could work together, for it is Miki's conviction that such communal labor can be a fundamental source of world peace. The “Eurasian Trilogy” represents the principal fruition of this concept. Miki's major work outside of his operas, it consists of three pieces whose Japanese titles identify them with the traditional performing arts concept of *jo-ha-kyū*. According to this concept, group of pieces of music, dance or theater is structured into three sections: *jo*, a ‘prelude’ or ‘beginning’; *ha*, a ‘broaching’; and *kyū*, a ‘rushing’, a rapid conclusion. There is generally an overall gathering of speed in moving from *Jo* to *ha* to *kyū*, although this may as here, be more of a conceptual than an actual acceleration.

“*Jo no Kyoku*” Prelude for Shakuhachi, Koto, Shamisen and Strings

When writing this piece (completed in 1969), Miki was possessed by the thought that both Japanese traditional instruments and modern music itself must be ever young and fresh. This, his first composition for combined native and foreign instruments, may be considered an expression of youth.

The *Shakuhachi*, *Koto* and *Shamisen* represent three distinct facets of typically Japanese musical expression, and they give life to those traditional feelings in this piece; the string ensemble counters this with a quintessentially Occidental sound. In the opposition of these two elements – the exquisite pathos of Japanese music and the complex yet crystal-clear Western ideal – the composer reveals his inmost longings. This piece was first performed in 1969 by Katsuya Yokoyama, Keiko Nosaka, Toshiko Sakai and the Tokyo Solisten, conducted by Shunji Aratani. This is the 10th performance of this work.

Duration: Approximately 16 min.

Instrumentation: Shakuhachi (2.4 feet), 20-string Koto, thick-necked Shamisen and Occidental Strings (4-3-2-2-1 x α)

Recorded by Nippon Columbia in 1970

*The 20-string Koto was developed by Keiko Nosaka and Minoru Miki in 1969.

“*Ha no Kyoku*” Concerto for Koto and Orchestra

This was Miki's second work for Japanese instruments and Western orchestra, following *Jo no Kyoku*. The motivating concept in his mind was the relation between man and nature: in ancient Japanese thought they were once, but in modern society man struggles against nature. The interaction between Koto and orchestra may be interpreted in this light.

Throughout the piece the Occidental instruments are brought into the service of Japanese traditional music. The first half of the work is built around an introductory horn motive inspired by the first phrase of the classic koto solo *Rokudan*. The second half is similarly set around a motive introduced by oboe, piccolo and flute, very much recalling the music of the Noh theater. All the other orchestra instruments imitate these themes in a typically Japanese fashion: the rhythms and melodies of different groups of instruments are slightly skewed, resulting in a type of polyphony called heterophony. The koto, meanwhile, is at odds with the orchestra late in the piece it seems as if the koto will be defeated. Then, in a passage of (literally) high-pitched tension, with the piccolo in imitation of the Noh flute and the trumpet sounding like the double-reed hichiriki, the koto breaks through with a vibrant cadenza. (This is the last of three koto cadenzas in the work, and was the middle part of the third cadenza created by Keiko Nosaka.) In the end, the koto reaches the serenity it had sought.

This work was composed in 1974 on a commission from NHK (the Japanese government-operated radio and television network), and was first performed by Keiko Nosaka and the NHK Symphony Orchestra, conducted by Kazuyoshi Akiyama. This is the tenth performance of this work.

Duration: Approximately 27 min.

Instrumentation: 20-String Koto Solo and Occidental orchestra (2-2-2-2 4-3-2-1 4 perc. & Strings.)

Published by Ongaku-no-Tomo-Sha Corp., 6-30 Kagurazaka, Shinjuku-ku, Tokyo.

Recorded by Camerata Records (CMT-1015-8), Yoshida Mansion 4-26-32 Jingumae, Shibuya-ku, Tokyo.

“*Kyū no Kyoku*” Symphony for Two Worlds

In 1978, Miki traveled to Leipzig with Pro Musica Nipponia (Nihon Ongaku Shudan), and it was then that the Gewandhaus Orchestra asked him to compose a work for orchestra and Japanese instruments to be performed for their 200th Jubilee Anniversary Celebration. After the acceptance, he thought that this would be a good opportunity to complete his long-pending project, “Eurasian Trilogy”. He finished com-

posing *Kyū no Kyoku* in July 1981, and the Nipponia and the Gewandhaus Orchestra gave its world première on November 12th and 13th, 1981 at the New Gewandhaus in Leipzig with Professor Kurt Masur conducting. The performances met with great success.

Kyū no Kyoku was given the English title "Symphony for Two Worlds" by the composer for two principal reasons. The first and foremost reason was to express the merging in this piece of instrumentaria of East (represented by Japan) and West. The instruments of both traditions have developed from several different cultures over many centuries.

The second reason was that this work is an attempt to fulfill the composer's heartfelt desire to overcome, through this opportunity of working together personally with Leipzig's Gewandhaus Orchestra, common recurrent feelings of deadlock or hopelessness at both the personal and political levels of communication between the East and West.

Miki has used the word "Symphony" with a conscious awareness of its Greek etymology: SYN-'together' and PHON-'sound'. By this he expresses the significance for him of this opportunity for the Gewandhaus Orchestra and Pro Musica Nipponia to work in companionship together and perhaps thus help to bridge the East-West gap.

As befits this concept, and also in keeping with the building of momentum in the concept of *jo-ha-kyū*, Miki has set *Kyū no Kyoku* for two orchestras, Eastern and Western, in a work of symphonic scale.

This work consists of an introduction and four movements. The introduction (6 min.) includes elements taken from each of the four movements. The tone series, which is comprised of 8 notes, combines the musical worlds of the East and West. In the German denotation the tone series reads: B,A,C,H,D,E,Es,G. The first half of the tone series, "BACH", is especially significant since the world premiere for "Symphony for Two Worlds" occurred at Leipzig, where J.S. Bach formerly resided and served as musical director. The second half of the tone series, D,E,Es,G, has a typically Japanese feeling. Also, each tone has its own chord system.

Various types of traditional Japanese instruments are used in this work: winds (fue and shakuhachi); strings (thick- and thin-neck shamisen, biwa, 20-string koto and 17-string bass koto); and various types of percussion instruments. The composer has employed not only a concerto form featuring a soloist, but also a more typically symphonic manner of composition order to more equally utilize the Japanese and the European instruments of the orchestra.

Duration: Approximately 36 min.

Instrumentation: Traditional Japanese instruments and Occidental Orchestra (3-3-3-3 4-3-3-1 3 Perc. and Strings)

Published by VEB EDITION PETERS LEIPZIG, 7010 Leipzig, Talotrasse 10 (in Japan, Ongaku-no-Tomo-Sha)

About the Composer

MINORU MIKI was born in 1930 and he graduated from the Tokyo University of Arts in 1955. His first major work, *Trinita Sinfonica*, received a prize from NHK and was first performed by the NHK Symphony Orchestra in 1953. In 1964 he founded the Nihon Ongaku Shudan (Pro Musica Nipponia) with 13 other musicians, dedicated to the further development of traditional music and to the creation of a new Japanese music for the traditional instruments as well as their western counterparts. The 4-record set, *The Music of Minoru Miki*, performed by the Shudan and issued by Nihon Columbia (JX21-24), won the Grand Prix du Disque in 1970, and in succeeding years the ensemble has played Miki's works in well over 120 concerts in Europe, Canada, USA, Australia, New Zealand and South-East Asia. In 1976 his opera *Shunkin-Sho* was awarded the Wienerwald Opera Prize and next opera, *An Actor's Revenge*, was commissioned by the English Music Theatre for performances in London in October 1979. The second 4-record set, Minoru Miki—Keiko Nosaka/Music for 20-string koto, issued by CAMERATA Record (CMT-1015-8) and received the Excellent Prize in 1979. Opera, *An Actor's Revenge*, was first performed in USA by the Opera Theatre of Saint Louis under the composer's conducting in June 1981. Both productions directed by Colin Graham. In October 1981, "KYU-no-Kyoku" Symphony for Two Worlds, commissioned by the Gewandhaus Orchestra had the world premiere at the new Gewandhaus by the Gewandhaus Orchestra and the Pro Musica Nipponia with Professor Kurt Masur conducting. Miki is the artistic director of the Nipponia.

Major works:

- Requiem (1963)
- Sextet for Wind Instruments and Piano (1965)
- Paraphrase after Ancient Japanese Music (1966)
- Time for Marimba (1968)
- Concerto for Marimba and Orchestra (1969)
- "Jo no Kyoku" Prelude for Shakuhachi, 20-string Koto, Sangen and Strings (1969)
- Tenryo* for 20-string Koto solo (1969)
- Convexity: Concerto for three groups of Sankyoku and a Japanese Drum (1970)
- Hakuyo for Violin and 20-string Koto (1973)
- "Ha no Kyoku" Concerto for 20-string Koto and Orchestra (1974)
- Shunkin-sho; An Opera in Three Acts (1975)
- Hote* (for large ensemble of Japanese instruments) (1976)
- Taro* Cantata for Solo Voices, Children's Chorus, and Japanese Instruments (1977)
- An Actor's Revenge, an opera in two acts (1979)
- Symphony from Life (1980)
- Concerto Requiem (1981)
- "Kyu no Kyoku" Symphony for Two Worlds (1981)



繊細な「心の感度」をうたいあげます。ときには激しく、またあるときは静かに。

私たちはCFを「ピアノの芸術品」と自信をもっています。そのことは、世界の檜舞台でヤマハを選ぶピアニストが、年ごとに増えていることでも証明されています。「ピアノは音の輝きだけではだめだ。弾く人の嬉しい心。悲しい心まで表現できるものでなければならない。CFには心の感度がある。」鬼オスビヤトスラフ・リヒテルのこの言葉が、CFのすべてをあらわしています。

YAMAHA CONCERT GRAND PIANO CF



箏



二十絃箏

箏を愛するすべての人の繊細な感情を忠実に音に表現するために、楽器の本質を追求した箏

日本音楽集団推薦

琴光堂和楽器店

東京都目黒区碑文谷 2-19-15 TEL (792)8481

“世界に響く日本の音”

新しい伝統を創り出すために、
紅屋の楽器をお試し下さい。
総桐琴。花林、犬皮三味線共に50,000円より、
調製して皆様のお電話御待ちしております。

紅屋琴三味線店

吉田岩雄

電話 昼0429-25-3935
夜0429-43-3030